

春秋中期の政治史（晋悼公—晋平公）

岩 間 秀 幸
瀧 本 可 紀

Abstract

Xun Ying died in 560B. C. at the age of 55 or thereabout. He fell into Chu state's hands alive during the Battle of Bi (597B. C.) After 10 years, he returned to Jin state by the Prisoner of War Exchange Pact.

Political power in Jin had passed from the lord to the nobles. Lord Li of Jin was killed by Luan and Xun noble family leaders. Luan Shu dispatched Xun Ying to Luo Yang, the capital of Zhou as a messenger to invite the lord of Jin state, Duke Tao.

In the days of Duke Dao, Xun Ying conducted real politics in Jin. His most successful strategy was the battles between Jin and Chu for Zheng state. Two years before his death he was healthy and fulfilled as the commander in chief. After his death, Duke Tao reorganized the Army. Troops under Xun Yan's command fought against Qin state. But without engaging in battle actually the Jin Army and the Army of dukes and princes states in Central Plains withdrew from Qin state.

Before long both King Gong and Duke Dao died and new leaders made their appearance. All of them led a life of luxury and paid little attention to the people. The war between Jin and Qi broke out in 555B. C. Qi was defeated by Jin and the capital of Qi Linzi was siezed. But the city was closely guarded and the soldiers had no intention to fight. They began to plunder everywhere in Qin state. Just at that time Chu began to attack Zheng. Immediately they withdrew to their own country. This time Chu didn't succeed and withdrew.

Luan Ying rose in revolt against government, but he could not succeed and Luan nobles were all ruined.

<執筆分担について>

全体構成の決定は、岩間秀幸と瀧本可紀両者で行った。Ⅰ～Ⅳを瀧本が、Ⅵ～Ⅹを岩間が執筆した。最後に、全体の内容と文体の統一を瀧本が行った。

春秋中期の政治史（晋悼公—晋平公）

I. 荀偃の死（前560年）

長江、漢水方面にある楚国が黄河流域の中原諸国を支配下に置こうとする時、最終的に関門となるのは鄭国である。その為、春秋中期の二超大国、楚と晋との間で、鄭を回って何度か戦が起こっていた。その中で最大のものは、楚の莊王が勝利した邲の戦（前597年）と晋の厲公が勝利した鄢陵の戦（前575年）である。春秋期の戦争は‘天に替りて不義を討つ’^{かわり}が建て前であった。又、封土（領地）の変更は周の権限でなされるもので、諸侯が勝手に変更できるものではなかった。それ故、戦に勝ち盟約が結ばれても、領土が変更されることは無かった。この原則は中原諸侯国（略して中国と言う）では適用されたが、小国や東夷、南蛮、西戎、北狄等の少数民族の国々ではこの原則が薄らいでいった。春秋期になると、晋、楚、齊、秦は周辺の国々を占拠して大国になっていった。一方、鄭、衛、魯のような中原諸侯国は多くの場合、互いに国境を接していて、領土を拡大する余地があまり無く大国になれなかった。大国晋、楚は鄭を確実に自らの陣営に引き入れようとした。

鄭はいずれの側に付くか迷っていたが、左伝襄公11年（562年）、鄭の大夫達は会を開き決着をつけようとした。鄭は晋に従わねばおそらく亡びるだろう。楚は晋より弱い、というのが彼等の意見であった。そこで次のような作戦を立てた。“これまで晋は我々をそれ程烈しく攻めなかったが、猛烈に我々を攻撃してくれれば、楚は我が鄭から手を引くだろう。その時こそ「吾乃固与晋」¹⁾ 吾及ち固く晋と共にくみせん。我々は晋側に固く就くことができる。”晋の中軍の将、荀罃は鄭を回る戦に決着をつけようと、諸侯の全軍を鄭に向けた。鄭側の作戦と晋の荀罃の決意が期せずして一致した。鄭は最終的に晋側に就くことになった。その二年後、左伝襄公13年に「荀罃・士魴卒」²⁾とある。

晋では中軍の将は軍の最高司令官であると同時に、最高行政官である。荀罃は中軍の将、士魴は下軍の佐（副官）であった。この両者が死去したため、晋の悼公は新たに軍の編成を行う必要が生じた。悼公は先ず、士匄を中軍の将に充てようとしたが、士匄自身はそれを辞退した。彼は自分より年長であることを理由に、荀偃を推して彼が中軍の将になり、士匄は中軍の佐に就いた。中軍の佐は軍及び行政のNo. 2である。続いて上軍である。悼公は韓厥の息子である韓起を上軍の将にしようとしたが、韓起は趙武を上軍の将に推した。悼公はNo. 7の新軍の将である趙武をいきなりNo. 3である上軍の将に就けるのは余り破格だと思ったのか、それを無視して下軍の将、欒黶^{らんえん}を上軍の将に任命しようとした。晋が鄢陵の戦（前575年）で楚に勝利した時の中軍の将は欒黶の父、欒書で、中軍の佐は士匄の父、士燮^{しやう}であった。それ故、士匄は中軍の佐になることに一応満足したであろう。その論からすれば、欒黶が中軍の将になっても不思議ではない。また韓起は上軍の佐であった故、上軍の将、荀偃が中軍の将ならば、韓起も一段階上の上軍の将になるのが妥当である。然し韓起はその地位に新軍の将、趙武を賢なるをもつ

1) 左伝襄公11年

2) 左伝襄公13年

て推したのである。欒黶は上軍の将に任命されるのを断って次のように申し出た。“自分は韓起には及びません。韓起は趙武が次部の上官になることを願っています。君、どうかそれをお聞き届けください。”そこで、上軍の将には趙武が、上軍の佐には韓起が就き、下軍の将には欒黶、下軍の佐は魏絳となった。新軍はその将、佐に当る適任者がなく、下軍に編入された。

趙武は数奇な運命を辿ったと言っても過言ではない人物である。それに関して佐伝魯成公8年の記述と史記‘趙世家’の記述とではその内容が異なっている。史記の記述の方がはるかに劇的であり、現在、これが語られたり、劇化されたりしているのは殆んど、史記に基づくのである。趙家は、晋公重耳の時の趙衰、又その子の趙盾は晋の正卿であった。趙盾の時、晋靈伝が趙穿に殺された。趙盾は正卿のままであったが、続く趙朔の時に趙氏は撲滅された。（左伝魯成公8年、前583年）ただ趙朔の子、趙武だけは生き残った。彼は韓厥の陰徳で復活し、一度祈禩に与えられていた趙氏の領地は再び趙武に戻された。晋の悼公が即位した際、彼は卿となっている。

新たな晋軍の編成を以前のものと比較すると次のようである。

| | 魯襄公9年（前564年） | | 魯襄公13年（前560年） | |
|----|--------------|----|---------------|-------|
| | 将 | 佐 | 将 | 佐 |
| 中軍 | 荀罃 | 士匄 | 荀偃 | 士匄 |
| 上軍 | 荀偃 | 韓起 | 趙武 | 韓起 |
| 下軍 | 欒黶 | 士魴 | 欒黶 | 魏絳 |
| 新軍 | 趙武 | 魏絳 | 荀罃→荀偃 | 荀偃→趙武 |
| | | | 士魴→魏絳 | |

但し、魯襄公9年の晋軍の編成は楚の令尹子襄が共王に述べた内容から記したものである。魯襄公9年、秦の景公が晋を伐とうとして楚に出兵を依頼し、楚の共王はそれを許可したが令尹子襄は反対した。子襄は楚荘王の子で共王の弟であり、楚の最高臣の令尹である。“[不可、当今、吾不能与晋争]³⁾ 与はwithで晋と戦うの意。いけません、今、我々は晋と戦うことはできません。晋の悼公は臣下をその能力に応じて用い、それに誤りはありません。それは卿大夫に始まり士は勿論、商工農の庶民に至るまで行き届いています。韓厥は老いて引退しましたが、知罃（荀罃）が跡を継いで政を行っています。中行（荀）偃は自分より年若い范（士）匄を自分より上に置き、中軍の佐にしました。欒黶と士魴は欒黶より若い韓起を自分達の上に置き、彼を上軍の佐にしました。魏絳は功多したが、趙武を以て賢であると、彼を新軍の将に、自分は佐となった。「君明臣忠」君主は明、臣下は忠。上譲りて下競う。「晋不可敵」晋は今や戦える相手ではありません。むしろ晋に仕えてこそ安心できます。君、この事を良くお考えください。”楚の共王は答えた。“[吾既許之矣] 我既に之を許す。「雖不及晋」楚は晋に及ばずと言え

3) 左傳襄公9年

ども、私は必ず出兵する。”⁴⁾ 楚の令尹子襄が晋国軍の編成を逸早く知っただけでなく、その経緯^{いきまつ}までも知っていたことに驚かされる。斯くて秋、楚の共王は軍を率いて武城に駐留し、秦国の後方支援をした。秦国は晋国に攻め入ったが、晋国は当時、凶作で反撃できなかった。

晋が荀罃の死後、軍の編成を終えた所に楚の共王の死亡が伝えられた。共王は偉大な父、荘王の跡を継ぎ、わずか10才で即位し在位31年であった(前590年～560年)。即位したのは晋齊の鞏の戦の直後であった。晋では君権を更に強めようとした厲公が大世族、郤氏を族滅したが、その直後、身の危険を感じた欒書と荀偃によって殺された。そこで新たに悼公が即位した。楚はこうした晋の混乱を利用して晋と呉の中継点である宋の彭城を占拠した。だが、晋は反撃してすぐに当地を占拠し、晋の団結力を楚に見せつけた。それ以後、楚の北上を阻止するため、鄭を回って晋楚の戦が続いた。次第に晋が楚よりも有力な事が明らかとなり、この戦は晋の勝利で決着がついた。この戦で最大の功労者が荀罃であり、彼が亡くなった事によって晋軍の編成が行われた。それが終わった時に楚の共王の死のニュースが入ってきたのである。

晋がそれを利用しようと思うのは当然である。但し直接楚を攻撃するのは、君主の喪中は攻撃しないという当時の礼に反する事である。寧ろ、近年楚と連合して度々晋や宋を攻める秦を懲らしめる方が得策と考えたのであろう。現状では秦は楚からの支援をあまり期待できない、と晋は予想したに違いない。晋は左伝魯襄公11年、櫟^{れき}の地で秦と戦い敗北した。それは晋側が相手の秦軍を軽視した所為であった。

II. 晋秦の戦(前559年)

左伝襄公14年の経文「夏諸侯之太夫 從晋侯伐秦 以報櫟之役也」⁵⁾ 夏、諸侯の太夫、晋侯に従いて秦を伐つ、以て櫟の役(戦)に報ゆるなり。晋は早速、櫟の戦の報復を口実に秦との戦を始めた。悼公は戦場に行かず国境で待機した。そして6卿(中年の将荀偃以下、下軍の佐魏絳まで計6人)に自軍と共に諸侯の軍を率いて進軍させた。春秋経襄公14年に依ると、集まったのは叔孫豹、晋の荀偃、齊人、宋人、衛の北宮括、鄭の公孫蠆、曹人、莒^{きよ}人、邾人、滕人、薛^{せつ}人、杞^き人、小邾人である。中原諸国の殆ど全てが協力している。これに加わらなかったのは楚に接した陳、蔡、許ぐらいのものである。尚、齊の崔杼、宋の華閱は参戦したにもかかわらず、その名が春秋経に無いのは、彼等が怠慢であったからである、と述べられている。「不書、惰也⁶⁾(書かざるは、怠惰であったからである。)」

この大軍は涇水まで来たが渡ろうとしない。晋臣叔公前以て魯の意思を打診していたので、何とか魯と莒を渡らせることに成功した。続いてその他の諸侯もようやく渡河した。大軍の戦意が無いことを証している。秦軍は涇の上流で毒薬を流しており、多くの将兵が死亡した。全軍は棧^{よく}林まで到達したが、秦側が屈服しないので、全軍の指揮官、荀偃は命令を出した。“明朝、行軍の準備を整え、余の馬がどちらを向いているかを見よ。”無論、その方向へ進むことを意味している。すると欒黶が言った。“晋国

4) 左傳襄公9年

5) 左傳襄公14年

6) 左傳襄公14年

でかつてこんな命令が出されたことは無かった。「余馬首欲東」⁷⁾ 余の馬首東せんと欲す。「乃帰、下軍従之」そう言うと共に帰国した。彼の指揮下の下軍も彼に従って帰った。荀偃はこの戦のわずか一年前に中軍の将となり、その経験が無かった。

荀偃は中行偃とも称される。春秋中期になると大きな世族は益々大きくなり、分裂が始まるものもあった。荀氏はその一例で、宗家（本家）の方が中行氏、分家の方が知氏又は智氏になった。荀偃は中行偃と呼ばれ、荀罃は知罃又は智罃と呼ばれる。知は領地の地名、中行は官名で歩兵軍団の長である。尚、知と智の区別は特に無い。古代は漢字の使用がそれ程厳密ではなく、例えば、楚の共王の共は「一緒に」の意ではなく「恭」の意味である。

鄢陵の戦の後、晋の厲公が三郤を殺したのを見て、欒書と荀偃は自分達が殺されるのを恐れた。そこで先手を打って、厲公が宮廷外に出ている時に彼を捕え、韓厥を呼んだ。然し韓厥はそれを断った。「中行偃 欲伐之」⁸⁾ 中行偃之を伐んと欲す。それに対し欒書は一言「不可」やってはならない」と言い、更に韓厥の優れた点を挙げている。「吾雖欲攻之 其能乎 吾之を攻めんと欲すれども、其れ能か。^{あとう}乃止」そこで韓厥を伐つのを止めた。欒書は新たな晋侯が出現するとすぐに死去した。この時こそ必要とされる人物が韓厥であった。温厚な彼は強権を振うことなく危機にあった晋の統一を維持したのである。

ここで、中軍の将荀偃の下で戦った晋秦の戦の荀罃が中軍の将として指揮した左伝襄公9年の戦とを比較してみる。荀罃は晋軍の中、上、下、新軍の下に諸侯の軍を割り当てた。中軍には齊の崔杼、魯の季孫宿、宋の皇郟が当てられた。これは晋秦の戦（襄公14年）とは全く異なる戦略である。晋秦の戦では三軍はそれぞれの将の指揮下にあったが、諸侯の軍は晋の三軍の将の下ではなく、それぞれの国の大夫の指揮にあった。それ故、晋国側は諸侯の軍を自由に進軍、退却させることができなかった。荀偃が退却したこの戦は「烏羽・伏見の戦」に似ている。最高指揮官である將軍、徳川慶喜が軍艦に乗って大阪城から江戸へ逃げ帰り、徳川勢全体が総崩れになった。だが、その結果は大きく異なっている。徳川政権は崩壊したが、晋国はその戦で特に大きな損害を被ったわけではない。その後、晋と秦の関係は友好的となり、両国間の戦争は春秋末期まで殆ど起こっていない。寧ろ、悼公の次の平公が病気になった際、晋から医者を招いた程である。

襄公9年の戦での荀偃と荀罃のやりとりからも荀偃の一面が伺える。荀罃は晋軍と諸侯の軍を率い鄭を攻め、鄭は降服を申し出た。然し、晋は楚がこれを見過す筈がないと判断し、その対応策を話し合った。荀偃は次の様に言った。「鄭の降服は受け入れず、このまま城を囲み続けよう。楚が攻めて来たなら決戦を挑み、楚を打ち破れば、鄭は二度と裏切らないだろう。」それに対し荀罃は鄭の和議の申し入れを受けようと言った。「楚が攻めて来た場合、4軍（中、上、下、新）を3つに分け、各軍に諸侯の軍の精鋭部隊を割り当て、楚軍の攻撃に対してその一軍が当たる。楚軍が進めば晋軍は後退し、楚軍が退けば晋軍は進む。三軍が順次この戦法をとれば、晋軍の疲労は少ないが、楚軍は堪えられない。そうすれば決戦をして多くの兵の白骨を野に晒すよりは、はるかに優れたものになる。」下軍の将、欒黶は

7) 国語晋語六

8) 左傳襄公14年

勿論その場に居り、齊の大夫、崔杼も中軍の援助者として参加していた。作戦を前にして、指揮官達が忌憚無く意見を出し合っている様子が伺える。秦との戦で、荀偃が指揮官たちと相談することなく命令を出したことに、欒黶は抵抗を感じたであろう。

荀偃は本来荀家の宗主であり、厲公刺殺の後は欒書と並ぶ地位にあった。欒書と荀偃との間の地位にあった中軍の佐、士燮は死に、上軍の将、卻錡は厲公に殺され、悼公の即位後すぐに欒書は死亡した。一般的には、荀偃が欒書の後を継いで中軍の将に就くのが当然であるが、韓厥が中軍の将になっている。荀偃は厲公の死に係わっており、その後時間があまり経っていないことが関係しているのであろう。だが、それより寧ろ、荀偃自身に対する評価が低かったのかも知れない。その後、韓厥が死に、替って荀家の分家である荀罃が中軍の将になった。荀罃が死んでようやく彼は中軍の将になった(左伝襄公13年)のである。

III. 士鞅 秦に行く

晋秦の戦で晋及び諸侯の全軍が撤退する時、欒黶の弟、欒鍼が士匄の子、士鞅を誘って秦軍に突入する事件が起こった。無論、これは無謀な行為で何等成果はなかった。その結果、欒鍼は死亡し、士鞅は生還した。事はそれだけでは終わらなかった。士鞅だけが帰って来たのを見た欒黶は事実を確かめようともせず、士鞅が欒鍼を誘って戦場に行きながら、自分だけが生きて戻った、と士鞅の父士匄に告げ、“汝が士鞅を追放しないなら、余が士鞅を殺す。”と言った。欒黶の士匄に対する言葉態度は仮にも上司に対するものとは思えない。欒黶は下軍の将であるが、士匄は中軍の佐で三段階も上の人物である。そこには家柄を誇る欒黶の驕りが見られる。それは、彼が欒家の宗主で、卿の中で唯一の公族の血筋であって異姓の卿とは違うと思っている事の一部を示している。この事件は7年後の欒家の族滅にまで発展していくことになる。

事情を知った士鞅は敵国秦へ逃げて行った。それを可能にしたのは春秋時代から始まる様々な人間関係のネットワークである。その根幹は同姓不婚の原則であろう。本来、中国社会は血族を中心としてでき上がっている。共通の先祖の本家、即ち大宗が天子である。その嫡男が大宗を継ぎ、それ以外の子、余子は小宗になり、天子の卿士や諸侯となり、更にその子たちは卿大夫、或いは士となる。家柄が重大な意味を持つとすれば、当然、結婚は限定されたものになる。上層階級の正式な結婚は政略結婚である。家柄が限定され、同姓不婚となると、同じ国家内での結婚は困難となり、他国から迎えたり、出て行くことになる。諸侯の例を見ると、魯は姫姓で齊は姜姓である。両者は隣り合った国で都合が良く、両者の結婚は盛んであった。それは国君に限らず卿大夫、士にも及んでいる。二国は常に戦争をしているにもかかわらず、個々の家族は両国間でそれなりの人間関係を保っている。二国間だけの移動ではなく、飢饉、疫病、戦争等によって、漢民族は中国大陸全土へと移動していき、遂には世界中に拡がったのである。

士鞅については上記のケースとは少々異なっている。士鞅が秦に行くと、彼は咎められるどころか秦の景公はすぐに彼に会い、晋の国内情勢について尋ねている。実は士氏は秦と浅からぬ縁があった。秦

の文公重可に続く晋襄公は在位わずか7年で死去し、その子供は幼かった。臣下達はこれから先の厳しい世界で国君として国を統治するには余りにも若すぎるとして、秦にいる重耳の公子、雍を呼び寄せることにした。その使者の一人が士会で、執政は趙盾であった。所が、これが決定された後、襄公夫人が自分の子の爵位継続を趙盾に強く要求して一步も譲らなかつた。趙盾はやむを得ず幼児を晋の靈公とすることに決めた。一方、秦側はそれとも知らず、公子雍を護衛兵付きで晋国へ向かっていた。趙盾は一行が晋に到着する前に彼等を殲滅しようと決め、自分がその任を果たした。これは‘令狐（地名）の戦’と言われ、その時、公子雍を呼び寄せた先蔑と士会は秦国へ逃亡した。

士会は兵学の知識が豊富で、その上に実践にも長じていたので、秦軍の強化に役立った。それは晋国の脅威となり、晋側は士会を呼び戻す算段を考えそれに成功した。士会は前620～前614年の7年間、秦国にいた。⁹⁾ 彼が晋に戻った後も土族の一部は秦に残っていた。左伝文公13年「其處者為劉氏」なおも秦国に留まった者達は後に劉氏と呼ばれた、とある。但し、この文は古来から疑問視されている。漢の高祖が士会の血を引いていると言われるのはこの文に由来している。

士会は晋に帰国すると、その本能を表し晋の高官になった。彼のみならず、その子孫も悼公の次の平公の時代に最高の地位に就いている。既に述べた様に、秦には土族が残っており、また、士会の評価は高く、士鞅の父、士匄は中軍の佐で晋国のNo.2の地位である。こうした事情が士鞅をためらうことなく秦に行かせたのであろう。

秦の景公は士鞅に問うた。「晋大夫其誰先亡」¹⁰⁾ 晋大夫、其れ誰が先に亡びん。「対曰、其欒氏手」答えて曰く、其れ欒氏か。秦候が言う。「以其汰」其の汰なるを以か。汰は高漫の意。答えて曰く「然」欒黶の驕りと残虐さは全くひどいものですが、それでも亡びるという事態は免れるでしょう。「其在盈手」其れ盈にあらんか。それはその子の盈の時に起こるでしょう。「秦候曰 何故」「どうしてそうなる。」士鞅答える。「欒黶の父、欒書の恩徳は民の間に感謝の気持ちとして残っており、欒書に対する思いはその子欒黶まで受け継がれる故に本人がどのような人物であれ、本人自身が亡ぼされる事は有り得ないでしょう。だが、欒黶が死んだ後、盈の善行が民に行き届く前に欒書が施した恩徳は忘れ去られるでしょう。同時に、欒黶が作り上げた怨恨は現実のものとなってきます。それ故、欒氏の滅亡は欒盈の身上に起こることになります。」秦の景公は彼の意見が見識であるものだと感心し、彼の為に晋国と交渉して彼を帰国させた。

この二人の応答は晋の国情が秦に詳しく知られている事を意味している。国家間で間諜を送り込むのは古今東西、当たり前であるが、そうした手段だけでは無く、大夫間からも情報が得られている。それは将来、あの広大な中国大陸が一つにまとまるようになる事を暗示している。秦景公が晋に話をつけて士鞅を帰国させた事は君主同士でも、個人的な繋がりを持っている事を示している。前546年の弭兵(休戦)協定に見られる様に、春秋中期になると執政の間にもネットワークができていた。晋の執政趙武と楚の令尹屈建とは知己の関係であり、宋の尚戌もこの二人を良く知っていた。

⁹⁾ 左傳文公13年

¹⁰⁾ 左傳襄公14年

IV. 衛の反乱

晋秦の戦は晋側の全面撤退で終わった。その時、衛では君主献公が上卿孫林父に追放され、斉国に逃亡したので(12年間)代りに公孫剽を君主に立てた。諸侯の大夫達は戚の地に会しこの事実を認可した。

献公は逃亡し斉との国境まで来た。彼は神官に自分が出国する事、そして自分が無罪である事を宗廟に報告するよう命じた。すると母である定姜が神官に言った。定姜はその姓から見て斉の出身であり、しかも斉の公族の一人であると推測できる。それで献公は容易に斉に行くことができたのであろう。尚、斉は前半は太公望、呂尚の姓姜をとって姜斉と言い、後半は田氏の姓をとって田斉と言う。「無神何告」¹¹⁾ 神がないなら、何も告げる事はない。もし神がいるなら、嘘を言っはなりません。献公には罪が有るのに、どうして罪が無いと言えるのですか。”そう言って5つ程罪の根拠を挙げ、“出国だけを告げれば良いので、無罪を告げる事はありません。”と言った。

これに類似した考え方は晋の荀罃にも伺える。荀罃が偃陽の戦で勝利した後(前563年)、宋を通りそこで本来天子の前で行う桑林の舞楽を見た。帰る途中に晋候が病気になり、占うと桑林の神の祟りと出た。荀偃と士匄は急いで戻ってお祈りをし、お詫びをしよう、と言ったが、荀罃は許さず言った。“私はこの舞楽を断ったのに、宋の人が勧めたのだ。「猶有鬼神、於彼加之」¹²⁾ それでもなお鬼神が出て来て祟るといふなら、それは宋の連中に崇れば良いのだ。”と言って二人を行かせなかった。間もなく晋公の病は治った。

定姜の話と荀罃の話には一つの共通点があると思われる。それは二人とも宗教心が厚くなく、神に頼って物事を円滑に処理しようとしなない事である。

春秋中期(2500年前)に既に無神論的思想が見られる。「2050年の世界」英エコノミスト(文春)、131頁によると、「不可知論と無神論の歴史は比較的新しく、18世紀末、ヨーロッパの小規模な最高学歴層の中で支持を集めはじめ、19世紀末には、やはりヨーロッパのエリート層で支持を加速させた。そして、20世紀に入ると支持はさらに広がり、世界人口に占める割合は、世紀初頭の0.2パーセントから、世紀末の約13パーセントへと上昇した。同時期に占有率がこれほど急上昇した宗教は存在しない。」¹³⁾

衛献公の出国に関して左伝襄公14年に二つの話が記されている。一つは晋悼公が盲目の楽師、師曠^{こう}の考えを問うためのもので、もう一つは荀偃に意思を聞いた内容である。師曠は音楽家であるだけでなく、社会のあらゆる分野に立派な見識を持っており、悼公の次の平公の顧問にもなっている。

「師曠侍於晋侯、晋侯曰、衛人出其君亦甚乎」¹⁴⁾ 師曠 晋侯に侍す。晋侯曰く衛人其の君を出す。また甚だしからずや。衛の大夫がその君を追放するとは全くひどいではないか、と師曠に言った。師曠は答えた。「或者其君実甚」或いは国君の方がひどいのではないですか。そもそも国君は神の主であり民の

11) 左傳襄公14年

12) 左傳襄公14年

13) 『2050年の世界』英エコノミスト131頁

14) 左傳襄公14年

望みです。「天之愛民甚矣」天の民を愛すること甚し。民の上に置いた君主の勝手気ままな行為や彼の邪悪を、どうして神はそのままやらせましょうか。「必不然也」必ず然らず。「必定不会 的」絶対にこんな事は有り得ません。”無論、悼公は献公の許し難い行為を知っていたであろうが、盟主として決定を下す前にもう一人の意見を聞こうとした。

「晋候問衛故於中行献子」¹⁵⁾ 故は‘事’の意。中行献子は荀偃。晋候は衛の事件を荀偃に問うた。荀偃は答えた。「不如因定之」因りて之を定むるは如ず。因は‘襲’で日本語の‘踏襲’‘受け継ぐ’の意。“成り行きにまかせ落着かせれば良いでしょう。「衛有君矣」衛には既に新たな君主が立っています。衛を伐っても思う様にはならず、かえって諸侯に苦勞をかけるだけです。「君其定衛，待時乎」君其れ衛を定めて時を待たんか。君は衛を安定させて、いつか衛を伐つ時期を待った方が良いでしょう。”

晋秦の戦が終わった時、悼公は戦について荀偃から報告を聞き、それに対して正式な評価を与える必要があったが、その余裕が無かった。晋軍だけでも大軍である上に、多数の諸侯の軍が加わっており、それらが落ち着くには、かなりの時間を要するため実行できなかった。戦の前に晋軍を編制した際、新軍を一時停止していたが、戦が終わって新軍の将佐に適任者が無く、正式に廃止することにした。結局、晋軍は三軍になり、大国の本来の姿になった。因に、周王朝は六軍、大国は三軍、次国は二軍、小国は一軍である。（周礼、夏官）。一軍は12500人で構成される。これと同年に衛の事件が起り、悼公は翌年、前558年に病死した。恐らく、この時すでに病気に冒されていて、荀偃に晋秦の戦について問い質す気力は無かったであろう。それでも目下の衛の事件を何とか解決しなければならず、先ずは、事件にどう対処するか荀偃に尋ねたのである。

春秋襄公14年の最後の経文に「冬，季孫宿會士^{きよ}，宋華閱，衛孫林父，鄭公衛蠆^{ちゅう}，莒人，邾人，于戚」¹⁶⁾とある。この会について、同年の左伝に「冬，会于戚，謀定衛也」冬 戚に会合したのは衛の混乱の安定を謀るものである、と記されている。この会で中国諸国の大夫は公孫剽の即位を認めた。

左伝の上記の文に続いて更に次の事が記されている。楚の令尹子 𢆏が呉を伐つより帰り、卒す。將に死せんとする時、次の令尹（宰相）子庚に遺言を残した。「必城郢^{えい}」必ず郢に城壁を築け。それまで楚は対外作戦で、戦場は全て国外であった。それ故、自国を守る必要性を感じておらず、首都、郢には城壁が無かった。然し、何度か呉と戦った彼は呉の強力さと将来性を見抜き、呉と対戦した場合、呉軍が首都郢まで攻め寄せる可能性がある事を想定していた。事実、これより半世紀跡、前560年に柏拳の戦で、郢は呉に占領されることになる。だが、当時晋と並ぶ超大国の楚は晋の使い走りにはすぎない弱小国呉に、郢が占拠されるとは夢にも思わなかったであろう。

このことは日本にも当てはまる。第二次大戦の最後の1年、せいぜい2年前までは、我々日本人は、戦争とは日本以外の地、外地で戦うものだと思っていた。事実、明治初期の台湾や朝鮮の江華島の事件から始まり、日清、日露の戦争、第一次大戦の日中戦争、太平洋戦争に至るまで、全て海外が戦場であった。太平洋戦争末期に大規模な空襲があり、最後には2個の原爆投下があったにせよ、米軍が戦場で日

¹⁵⁾ 左傳襄公14年

¹⁶⁾ 左傳襄公14年

本に上陸したのは沖縄のみであった。それ故、我々日本人は沖縄以外に国内での地上戦を経験していないことになる。この点は第二次大戦で最後まで戦ったドイツとは異なる。

V. 晋悼公の死

襄公14年は終り、翌年15年は前年と比べはるかに静かな一年であったが、この冬「晋侯周卒」¹⁷⁾と経文にある。周は悼公の本名。悼公は晋国の大混乱の中、14才で洛陽から欒書の指名により登場し、侯位に就いた。在位は前573年～前558年の16年間で、わずか30才前後で亡くなった。「人口の世界史」(マツシモ・リヴィーバッチ 東洋経済新報社、2014年)「第一章 人口の成長の空間と戦略の31頁の表1.2人口、出生数および生存年数：紀元前1万年から西暦2000年まで」に依ると、平均寿命は前1万年—20才、0年—22才、1750年—27才、1950年—35才、2000年—56才であった。¹⁸⁾

人類(ホモサピエンス)は1万年前から徐々にユーラシア大陸の東西、近東と中国で狩猟採集民から定住農耕民に移っている。それから1750年までの間に、平均寿命は20才から27才へとそれ程伸びているわけではない。今、話題にしている春秋期では、平均寿命は22才で1万年前とほぼ同じである。日本に注目すると、戦前、即ち昭和初期の平均寿命は40才位であった。織田信長の時代でも昭和初期でも‘人生50年’とよく言われたが、これは出生前の高い死亡率をくぐりぬけた後の人々の寿命である。昔から70才を古稀と言うが、唐の詩人杜甫の‘古来稀なり’という言葉が日本でも使われてきた。しばらくはリアリティーのある言葉であったが、現在の男性の寿命は80才、女性は87才で、古稀は廃語になってしまった。

悼公は才能豊かな君主だと言える。先ず、内政を良く整えた。それまでの有力な世族、欒、荀、士、韓家に加えてかつての文公のゆかりの家、趙家、魏家を卿にし、特に趙武と魏絳と取り立てた。また荀家については、宗家の中行偃より小宗の知罃の方をとりたてた。斯て、卿大夫の関係は宥和し、対外的な力も増大した。

悼公の晩年の左伝襄公11年、鄭の大夫達が「不従晋、国幾亡 楚弱 晋」幾はほとんどの意。晋に従わざれば、我が国はほとんど亡びん。楚は晋より弱し、とはっきり言う程になっている。当時の大国、楚との戦いで何度か勝利している。かつての桓、文の如き覇主にはなれなくとも、それに近い存在にはなっていた。ただ、悼公はこの二人と比べて相当若くして死亡しているので、大きな成果を挙げられなかったのは無理もなかった。然し、悼公晩年の晋秦の戦いで、内部の貴族間の分裂が露出し始めていた。

VI. 晋平公の時代(前557年—前532年)

前558年の冬に悼公は死去し、翌年前557年正月に悼公を葬り、平公が即位した。続いて三月に「公、晋侯・宋会・衛会・鄭伯・曹伯・莒子・邾子・薛伯・小邾子に涙梁せつで会す。戊寅(3月26日)大夫盟す」¹⁹⁾

17) 左傳襄公15年

18) 『人口の世界史』マツシモ リヴィーバッチ 31頁

19) 左傳襄公16年

と襄公 16 年の経文にある。総勢 11 ケ国の諸侯が参集しているにもかかわらず、齊公だけは参加していない。

左伝に依ると、晋平公は溴梁に会し侵略した土地を各々、元の国に戻さしめた。又、魯を伐ったことで邾子、莒子を捕らえた。その後晋侯は温に行き宴会を開き、大夫達に舞させた。齊侯は来なかったが、齊の大夫、高厚が来ていた。齊には国、高の上卿がいた。元来、齊の如き大国には卿が三人で、二人は周王が命ずる者で命卿と言い上卿である。その下の一人が国君の命ずる下卿である。これに関して次のような話が知られている。

管仲が周王朝に尽したのを賀して、周王が管仲を上卿の待遇でもてなそうとした時、“自分は下卿であり、もし上卿として待遇されたら、国、高の両氏をどうなさいますか。”と言い、上卿の待遇を遠慮した。

高厚には、大国の命卿は次国以下の国君と同格だとの強い思いがあった。晋の荀偃が高厚の舞はこの場にふさわしくない、と怒った時、高厚は盟わずにさっさと逃げ帰ってしまった。残った魯の叔孫豹、晋の荀偃、宋の尚戍、衛の甯殖、鄭の公孫董、小邾の大夫達が盟つたのは「同討不庭」共に不庭を討つてであった。不庭は本来、朝廷に謁見していない者の事であるが、ここでは盟主に不忠な輩の意で、盟主に不忠な齊を共に討伐しよう、ということになる。これは齊を伐つ事を意味している。

この会で許公が国都を楚から晋へ移動したいと願い出た。然し、許の大夫達は反対した。そこで晋は軍の統率権を握ろうと、諸侯を帰国させ、各諸侯の師は残した。幸いにも齊の人は誰も残っていないので、反抗の心配は無かった。鄭の子蟻は晋が許国を討つと聞いて、鄭公に出馬を要請し、他の諸侯の師と共に許を討った。春秋も中期になると、各国の師を率いるのは諸侯ではなく、その国の卿の大夫になっていった。

鄭がこの戦に熱心だったのは、鄭と許との間には長年に亘る関わりがあったからである。春秋の初期、魯陰公 8 年、前 715 年の事である。晋平公元年より、役 160 年前である。当時、周王朝は西周から東周の洛陽に移り、政治権力はみるみる衰えつつあった。鄭は王朝の卿士でもあり有力な国であった。鄭の荘公は自己の所有する、泰山を祭るための魯の近くにある柘の地と鄭の近くにある魯の土地、許（魯が洛陽に朝見するための宿所）との高官を申し出た。諸侯が王名も無く勝手に自分達の領地を交換するなど、認められる筈の無い事が早や起ころうとしている。天下の土地は全て周王の物で、各侯はただ一時的に拝借しているに過ぎない、という決まりが徐々に消滅しつつある証拠である。

この交換で鄭の所有する柘の地はすぐに魯に送られた。この地は小さな土地で、鄭はそれ以外に、宋と戦って占領した郟や防の邑も魯に与えた。だが、許は鄭の物にはならなかった。魯と許はとても離れており、その間には曹、宋、邾、滕の諸国が介在している。しかも許は太岳の後だと伝えられている。魯が宋主国だとは言え、許は事実上、独立国同然であった。魯が定期的に洛陽に行く事も最早なくなっていた。左伝隠公 11 年、これを解決するため、魯の隠公は鄭伯と会い、許を討つ事を謀った。その後齊侯がこれに加わり、三国が協力して戦いに勝利した。許の荘公は衛に逃げた。齊侯は許を魯に与えようとしたが、魯公は拒否したので、鄭に与えることにした。鄭伯は許を自国の領土とせず、東側を許の

莊公の弟、許叔に与え、許の大夫、百里に許叔に仕える様命じた。西側は許の大夫、公孫獲に任せた。許は現在の許昌市の東で、鄭国と楚国にしばしば襲われ、四回も国都を遷している。

鄭にとって許は、それ相応の対価を払って魯から譲られた筈なのに、許は一向に鄭の付属国の態度は取らない。それ故、許と鄭の関係は必ずしも良好とは言えず、更にそこに楚と鄭との関係、更には晋との関係も加わることになる。

VII. 湛阪の戦

前 557 年、晋と楚は湛阪^{たん}で戦い楚は大敗を喫した。晋軍を迎えた楚の公子、格は相手が荀偃と欒黶だと知って、部下とともに勝利を確信したであろう。2年前の晋秦の戦の経過は充分楚に伝わっていたに違いない。「晋師遂侵方城外、復伐許而還」晋の師遂に（そのまま）方城の外を侵し復、許を伐ちて還^{かえ}る。方城の北とは河南省の南、楚と陳、蔡との境である。荀偃と欒黶は晋軍を率いて方城の北面まで来たのである。二人は方城と聞いて感慨ひとしおであっただろう。日本でも江戸時代の知識人たちも方城を聞くと、同様の感慨を覚えたに違いない。

この地は齊の桓公が前 656 年に楚の成王と召陵で陣を布いた時の事を思い起こさせる。桓公は魯、宋、陳、衛、鄭、許、曹を含めた大軍を率いている。楚の成王は屈完を軍俠として召陵に行かせた。桓公は屈完を車に乗せて一緒に自分の大軍を閲兵させた。“この大軍で戦えば、いかなる軍も敵対することは出来ないであろう。”と言った。これに対し、楚の屈完は堂々と言った。“「君若以力」君若し力を以てせば、君がもし武力を用いるなら、「楚国方城以為城、漢水以池為」楚国方城を以て城となし、漢水を以て池と為さん。”方城は楚の国境地帯の山並み、城は城壁、漢水は河北省から南下して武漢で長江に合流する河。武漢の漢は漢口で、漢水の合流点、池は日本で言う城のお堀り。この戦で晋楚の対戦は終わりを迎えることになる。

VIII. 平陰の役

晋の悼公が亡くなり平公が即位したときの盟会に、齊侯だけは出席せず出席した大丈高厚も途中で退席するなど、晋と齊との関係は悪くなっていた。晋秦の戦に参戦した崔杼の名前が左伝襄公 14 年の経文に載っていない。「不書愾也」書かざるは愾^{おこた}ればなり。崔杼だけでなく、宋の華閱及び仲江の名も見られない。ただ齊人、宋人と書かれているだけである。要するに彼らは顔だけ出して積極的に何も為さなかった事を意味している。恐らく、彼らは晋軍指揮者、荀偃や欒黶達の行為に呆れたのであろう。帰国してから出された戦の報告、推して知るべしである。然し、人間は状況によって変わり得るものである。

晋の公位が交替した時期より、齊及びその従属国邾が魯に攻め入るようになった。魯はこれを晋に訴え、晋は全 555 年、遂に諸侯の軍を集め、齊を攻めることにした。齊は平陰で迎え撃つ作戦を取り、防門の前に中の広い溝を掘って防備を堅めた。晋軍は攻撃を仕掛け齊に多大な損害を与え、齊に多くの死傷者が出た。この戦では事前に、士匄が知り合いの齊の大夫に、晋軍に啞えて他国の大軍も押し寄せる

という情報を流しており、それが齊の靈公に伝わっていた。齊の靈公は巫山に登り晋軍の状況を望遠すると、恐ろしい大軍が目に入った。実は、これは晋側の‘擬兵の兵法’だったのである。‘擬兵’は敵を欺くために配置する見せかけの兵のことである。山野到る処に旗がはためき、兵車の左には人間、右には人形を乗せ、車の前に大旗をひらめかせ、後に大きな木の枝をつけてもうもうと土煙を上げさせる。彼はそれに驚き、真先に一人で逃げ去った。無論、齊軍は崩壊して靈公に続いて逃げ去った。

晋軍は逃げる齊軍を追って齊の首都臨淄に迫った。外城の郭は乗り越えられたが、堅固な内城には突入出来なかった。然し、場内に居た靈公は恐れおののき、城を脱出しようとした。国君が脱出したとなれば、軍は総崩れになり敗北は必至である。それを防ぐ為、皇太子、先は剣を抜いて靈公が脱出しようとする車の午の綱を切り、脱出を阻止した。一方、晋側は防備十分な臨淄城を攻め倦み、齊国内の邑を次々と襲い、略奪を恣いのままにした。

春秋時代の戦は攻城と野戦で、野戦は広大な野で戦う車戦で速戦速決である。春秋期の有名な大戦、城濮の戦、邲之戦、鞏之戦は全て一日の内に決着がついている。然し、攻城戦はそれとは異なる。楚の荘王は邲の戦の後、前 595 年、宋の都を土山を築いて包囲したが、9 か月かかっても落城しない。兵站線の補給が不足し始め、流石の楚王も撤退論を採用しようとした。その時、屯田兵の作戦で長期戦に持ち込む戦略が出され、荘王はそれを採用した。それを知った宋側はこれ以上の交戦は無理と判断し降伏した。

攻城戦の場合、攻撃する側は最低敵の兵力の 3 倍の兵力を要すると言われている。しかも、勝利を得たとしても損害は大きい。それ故、攻城する際次の様な方法がとられる。前以て敵城内に内通者を探し、可能ならば戦う前に城主と和解するか、城門を開ける手段をとらせる。又別の方法として、大兵力を門の前に並べ、抵抗することが不可能だと思わせるようデモンストレーションを行う。それによって敵の方から降伏、和解を求めるよう仕向ける。実際に攻撃する際の方法としては次のものがある。

1. 城壁の周りを土山で囲み、城の中を観察して軍の攻撃を援護する。
2. 門攻め。門攻め一般的な方法である。各種の方法で門を突き破り、中へ突入し市街戦を行う。
3. 蟻戦。士卒に蟻の様に城壁を登らせる。(梯子、綱、楼車、その他何でも可) 但し、死傷者が多く、上策ではない”²⁰⁾

18 世紀頃、強力な火砲が出現して、城壁の威力が減少するまでは、攻城作戦は困難を極めた。

攻城戦が長引くと他から攻撃を受け、場内と場外と二重に包囲されることになる。晋が齊と戦って臨淄城を囲んでいる時、楚が鄭を攻めてきたという情報が入った。無論、こうした想定内の事なので、晋側は臨淄城の包囲を解き、督場で会した後散会した。晋側の攻城戦の様子から見て、晋側は上記の戦法をとっておらず、積極的に攻城する繊維が見られない事を示している。

鄭は晋に協力して子蟻、伯有、子張が鄭簡公に従って齊の攻撃に加わっていた。留守を守っていた大夫は子孔、子西、子展であった。彼らは鄭穆公の系列の人で七穆と呼ばれ、最大の派閥で大きな政治権

²⁰⁾ 『春秋史』顧徳融 328 頁

力を握っていた。前563年に鄭で反乱が起り、当時、最も権力を握っていた子駟、子国（子産の父）、子耳が殺され、この反乱を裏で操ったと噂された子孔が執政となった。突然の事だったので、急遽、当座の人物として子孔が執政となったのである。七穆の中には家柄が彼より上座の者が何人か居た。それ故、執政の彼に敬意を払わない者が居た。彼は彼らとその背後にいる晋を排除したいと思い、楚に助力を期待して楚に接近した。楚の令尹子庚は承諾しなかったが、楚康王はこれを利用しようと思い、子庚に兵を率いて鄭に行く様命じた。この時、鄭の簡公達は齊から帰国する途中であった。子展と子西は子孔の意図を知って都の守備を嚴重にし、子孔が楚軍と会えないようにした。令尹子庚の軍は鄭の都まで攻め入り、城下で二泊した後帰った。洧水を渡る時大雨に逢い、寒さで凍え軍人の多くが死に、人夫はほとんど全滅した。結局、子孔は鄭都まで来た楚軍と協力することが出来ず、目的は達成できなかった。その後、鄭の軍は齊から帰国し、又国人達は子孔の陰謀を知って彼の家を攻め、子孔を殺し、その家を分割した。子孔に代わって政権を握ったのは子展と子西、そして後に名を成す子産であった。

IX. 齊の靈公の最後

晋が去って齊には平安が訪れる筈であったが、内紛が始まった。靈公は魯から妻を娶ったが子は無く、その媵（正夫人に伴う他国の公女）が生んだ光を皇太子にした。靈公には仲子と戎子の二人の姫妾が有り、戎子が特に寵愛されていた。仲子に子が生まれ牙と名付けられ、その子を戎子に托した。戎子は靈公に牙を皇太子にする様求め、靈公はそれを承諾した。いろいろな方面からそれを実行しないように要請されたが、靈公は「在我而已」我に在るのみ。“太子の廢位は私が決定することだ”と言って譲らず、太子光を齊の東部地区に追いやった。そして、牙を太子とし、高厚を守り役（傅）、夙沙衛を高厚の下役の小傅にした。

間もなく靈公は病気になり、崔杼は密かに光を都へ連れ戻した。靈公が危篤になると光を元の皇太子に戻し、靈公が死ぬと光は即位し莊公となった。その間に戎子は殺され、その屍は朝廷に晒された。左伝はこれを「非礼也」と非難している。公子牙は捕らえられ、夙沙衛は高唐城へ逃げたが、そこで殺された。

魯襄公19年、魯及び諸侯は各々自国へ帰ることになったが、その帰途、中軍の將荀偃は高熱を発し、頭に瘍ができ死亡した。晋士句は齊との戦に決着をつけることなく軍を引き揚げ、先年の晋秦の戦の二の舞を演じたのを恥じたのであろう。自ら指揮に再度軍を向けた。然し、途中で齊靈公が死に葬を行うと聞き、兵を返した。左伝はこれを「礼也」²¹⁾と記している。

同年の秋、齊の崔杼は高厚を殺し、同年の左伝に「兼其室」²²⁾とある。兼は兼井で併呑の意、室は家財、使用人及び領地の意。崔杼は高厚を殺しただけでなく、土地（領地を含む）財産を全て奪った。高氏は国氏と並ぶ齊の二大卿族である。国氏で最有力な国佐親子が齊靈公に殺されたのと同年に、晋厲公は欒書に殺されている。高、国両氏とも晋の郤氏のように撲滅はせず、一族はある程度残っているが、その

21) 左傳襄公19年

22) 左傳襄公19年

後の勢力は大きく減少している。斯くて、齊は齊莊公を取り巻く崔杼と慶封の時代になった。

X. 欒家の滅亡

齊の莊公は内部を固めるため大隧で晋国と講和を結び、晋と齊との関係は一応治まった。すると晋国内で大きな内乱が始まった。きっかけは又かという話である。士匄の娘、欒祁が欒黶の妻となり欒盈を生んだ。其の後、欒黶が死に、欒氏の家臣の長、州賓と彼女は通じた。家の財産を使いつくす程の乱行で欒盈は心配した。欒祁は欒盈が自分たちを訴えるのではないかと恐れ、父親の士匄に欒盈が謀反を起こそうとしていると告げた。欒盈は父欒黶と異なり、人情味が豊かで人に施すのが好きで、多くの人が彼を慕っていた。士匄は欒氏がかつての欒書の時のように盛えるのは堪らないと、娘の言葉を受け入れた。息子の范（士）鞅も以前欒黶より秦に行かざるを得なかったこともあり、欒祁の言を真実だと証言した。范（士）匄は欒盈を追放し、彼は楚に行き、それから彼の同志達が逃げた齊に行った。この時、范匄は多くの盈の同志を殺した。この間に范匄は度々盟会を開き、欒盈を誦する（ある国でその人物を官職につけない）よう各国に知らせた。齊の莊公は家臣から、欒盈の受け入れに問題があると忠告されたが、それを拒否した。平陰の役で晋から手酷く損害を受けたことへの反抗でもあった。

前550年、晋の公女が呉の夫人となり、齊の公女が媵となったので、晋を経由することになった。欒盈達はその護衛兵に便乗することにした。莊公はこれをチャンスに晋で一暴れしようと思った。一行は無事に晋に到着し、欒盈は元の領地、曲沃へ行った。そこは未だ他の人の領地になっておらず、その管理人、言わば代官の如き胥午に夜、出会った。そこで反乱の計画を胥午に打ち明けると、彼は言った。「不可。天の所廢 誰能興之 子必不免 吾非愛死也」²³⁾ 不可、天の廢する所、誰か能くこれを起さんや、子必ずや免れず。貴方はきっと災難を逃れられません。私は別に死を愛惜（惜しむ）しているわけではありません。「知不集也」集らざるを知らば也。今回の計画は成功しないのが分かっているからです。」欒盈は言った。「雖然、因子而死、吾無悔矣」然りと雖も子に因りて死せば、吾悔いし。「能得到您的支持而死 我不後悔」您是你的敬称。貴方の指示を得ることができて死ぬなら、私は後悔しません。「我実不天 子無咎焉」天は天佑で天の助け。失敗すれば私が全く天の助けを持ってなかったからで、貴方には何の罪は有りません。「許諾^{しよご} 胥午は承知したのだ。息詰まるようなやり取りである。

胥午は曲沃という広大な領地を差配しており、中央政府から派遣された高官なのか、欒家と縁の無い曲沃の高官なのかは解らない。名前から察すると、晋厲公が欒書に殺された時、同時に殺された側近、胥童の一族かもしれない。

胥午は欒盈を皆に紹介する手立てを講じた。彼は欒盈の事には触れず、曲沃の名士達を酒宴に誘った。音楽が始まって胥午は尋ねた。「今、もし欒盈殿に御会い出来たらどうしますか。」席にいる人は答えた。「主人を得て彼の為に死ぬるなら、死んでも生きているのと同じだ。」皆は感無量で、泣く者も居た。胥午は杯を挙げて再度、同じ質問をした。皆は言った。「もし主人に出会えたなら、どうして二心など持

²³⁾ 左傳襄公 23 年

ち得ましようか。”その時、「^{あまわく}盈出偏拜之」²⁴⁾ 欒盈が出て来て一同に拝謝した。

その後、欒盈は曲沃の甲兵を率いて都、絳へ出発した。魏側の手配で彼らは白昼堂々と入城出来た。当時の晋国の卿は二派に分かれていた。一つは欒家と魏家で、もう一つは趙、韓、中行、范であった。欒盈を支えたのは魏家と七輿大夫のみであった。大夫は諸侯の車の為に居る大夫で、「周礼、大行人」に依ると、侯、伯級の諸侯は七車輛の副車を持ち、各車毎に一名の大夫が責任を持ち、七輿大夫と称す。中行家（荀本家）は晋秦の戦いで退却で、欒家を恨んでいた。知家は知罃（荀罃）が死んで幼い知悼子を後を継いだばかりで、全て中行家に従っていた。范（士）家も士鞅の一見で欒家を恨んでいた。

こうした情勢から考えて、胥午は欒盈に計画は不成功に終わるだろうと断言したのであろう。魏家は晋文公重耳の側近であったが、初期の段階での失敗の為、その後は一度も卿になることは無かった。晋悼公の時、各世族のバランスを取ろうと悼公が魏家を卿にし、特に魏絳を寵愛した。然し、襄公13年の荀罃死後の晋軍編制では彼はせいぜい下軍の佐で、下軍の将は欒黶であった。

春秋中期より軍の内容が大きく変化した。それまで軍の主力は国軍で、それを指揮する族長（将佐）に私属する部隊が従であったが、次第に族長の私属が軍の有力部分を占め、国軍の地位が低下した。晋国のような大国の首都にまで敵国が侵入することは先ず考えられない。首都を取り囲む封土が存在し、封土が軍を所有しているのである。裏を返せば、首都そのものの守備は必要が無くなっている事を意味する。それ故、欒盈達の氾濫もある程度、成算が見込まれた。魏家との協力作戦は進み、魏軍が勢揃いしたところに士鞅が一人で乗り込んで来た。彼は族長魏舒の車に飛び込み剣を突き付け、車をそのまま宮殿に乗り付けさせた。執政范匄は階段まで出向き、「執其手 賂以曲沃」²⁵⁾ 其の手を執り、賂に曲沃を以てす。魏家に曲沃を譲ると明言した。無論、これは范匄の独断であったに違いない。こうした時に相談する時間は無い。‘将は戦場にあると必ずしも君命を守るとは限らない。’いかなる想定外の事件が起こるか予知できない、という事である。我が関東軍はこれを利用して、朝鮮軍の満州への越境作戦を敢行したのである。‘曲沃を与える’という范匄の言葉は欒家の滅亡を決定づけた。それと同時に、魏が戦国初期に大国となる契機となった。

斯くて、魏軍の援助を失った欒盈勢は孤軍奮闘すれども敗北した。続いて曲沃に退き、そこでも敗北し、欒家は完全に撲滅されてしまった。それ故、公族の血筋を引く卿は晋には一人も居ない事になった。

参考資料

- 本編の公羊穀梁傳の歴史的背景は‘春秋’及びその三伝と史記に基づいて書いたものである。
- ・春秋史 顧德融 朱順龍 上海人民出版社 2001年
 - ・春秋战国的社会变迁（上下）晁福林 商務印書館 2011年
 - ・左傳国策研究 郭丹 人民文学出版社 2004年
 - ・春秋婚姻礼俗と社会倫理 陳筱芳 巴蜀出版 2000年
 - ・《春秋》経傳研究 趙生群 上海古籍出版社 2000年

²⁴⁾ 左傳襄公23年

²⁵⁾ 左傳襄公23年

春秋中期の政治史（晋悼公—晋平公）（岩間・瀧本）

- ・《春秋》考論 婁曼波 江蘇古籍出版社 2002年
- ・国語集解 徐元誥 中華書局 2006年
- ・An Outline History of China Bai Shouyi Foreign Language Press Beijing (2005)
- ・「人口の世界史」マツシモ・リヴィーバッチ 東洋経済新報社 2014年
- ・「2050年の世界」英エコノミスト編集部 文藝春秋 2012年
- ・王維堤・唐書文 春秋公羊傳訳注 上海古籍出版社 1997年
- ・薛安勤 春秋穀梁傳今注今訳 台湾商務印書館 1994年
- ・承載 春秋穀梁傳訳注 上海古籍出版社 1999年
- ・李宗侗 注釋 春秋公羊傳今註今譯 台湾商務印書館 1972年
- ・傅隸樸 春秋三傳比義（上・中・下）中国友誼出版公司 1984年
- ・玉寧主編 評析白話公羊傳・穀梁傳 北京廣播学院出版社 1993年
- ・劉尚慈 春秋公羊譯註（上・下）中華書局 2010年